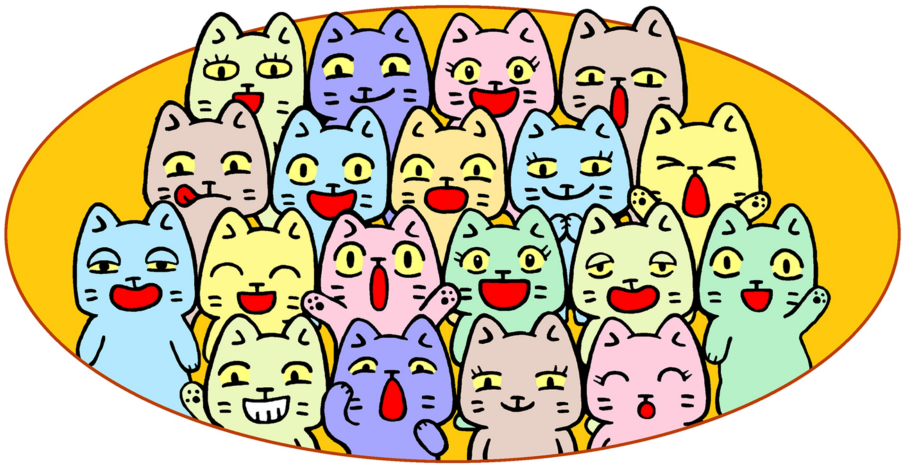
介護の現場から

介護の仕事を始めてから、何人もの人を穏やかに見送ってきましたが、私の母は心臓病があったので、ある日突然亡くなってしまいました。心の準備のないまま亡くなってしまうことが、残された家族にとってどれほど辛いか、身に染みました。母の介護をもっと十分にしたかったのですが、介護的なことといえば受診の送り迎えぐらいでした。一度転倒してから歩行が不安定になり、押し車を使うようになりました。常に、転倒のリスクがあるにも関わらず、恥ずかしがって入浴介助もさせてくれませんでした。食事も「自分の分は自分で作る」と言って、好きなように作って食べていました。人工透析もしていたので旅行にも行けず、食べることぐらいしか楽しみがなかったのに、その楽しみさえも食事制限でなくなって辛そうでした。ダメダメではなく、何を優先させるかは、家族として難しい選択だと思います。今でも母を思い出す度に、もっと色々したかったと思います。このような母への思いを抱えながらグループホームの利用者と接していますが、入居されている人は比較的元気な人が多いので、楽しく介護ができています。そして家族には、終末期を迎えた時には、できるだけ心の準備ができるように寄り添いたいと思っています。　　（グループホーム共生の里：N介護福祉士）